

るも、上流社會にて資産ある者は、左程重用視せぬは、遺憾なれども私はこれより此等の者と相謀り、女子教育振起策を講じようと思ふ。

私の學校の格言として守る所の者は「吾等は與へるが爲に受くるなり」にて即ち人の與へるが爲に享るなりと云ふ詞で此は私の學校のみならず印度一般高等教育を望む者の格言である。

(大日本婦人教育會雜誌)

●圓滿なる並に不和なる家庭の實例

高島平三郎氏

或處に母と一人の息子とが暮して居た。其息子に妻を娶つた處が、姑は嫁に對して十分の同情を寄せ、嫁も亦よく姑に事へ良人に愛敬を盡すので些の波風も立つた事がない。一日良人は薪を造ると云て樹に登り枝を伐つて居ると其枝が過つて樹下に在つた釜を破した。そこで嫁は「私放心して釜を樹の下に置いたものですから……」と言つて其粗忽を謝つて居る。又良人は良人で「マア、く頁傷をしなかつたのが何よりだ。不注意に投げ下して濟

まなかつたと……」詫びて居る、そこへ姑が出て来て「私が嫁に氣を付けて差圖をしつてやらなかつたのが悪かつた……」と言つて居る。萬事が此通りで互に思遣があるから何時も和氣藪々たる家庭を作つたといふ

或處に母と一人の子が住んでゐた。其子に妻を迎へてからはイツも家内に波風が絶えなかつた、或日夫は用事で旅をすると、自分で草鞋を作り、母は其子の看るべき衣物の袖を縫ひ、妻は其辨當を拵へると釜から飯を移してゐた、三人共中々忙がしい然るに姑はシロリと嫁がする仕事を見て居る。嫁は姑が何をしてゐるのかとチラリと見る。夫はまた嫁姑の仲の悪いのを心配して二人に心を配つて居る。三人共イツか手許が留守になつたために、夫は一丈餘りの草鞋を拵へ、嫁は飯を悉く灰の中に移し姑は衣物の袖口を皆な縫つて仕舞つたといふ(兒童研究)

